

## 農本主義と産業組合運動

### —山形県庄内地方を事例として—

青森公立大学 菅野 仁

戦前期の東北農民が、国家政策に対する反発や同調といった対応を通して、自分たちの生活を組織化しながら、自らの生活利害を貫徹していった実情を明らかにすること——これが本報告の課題である。そのことに関して、山形県庄内地方、とくに旧新堀村の動きを事例として検討を加えたい。つまり旧新堀村においては、ここで言う国家政策への対応が、単なるその場その場で偶然的になされる経験的判断ではなく、かといって現実の動きから全く遊離した理念の自己展開でもなくなされたのである。そしてこのことは、とりわけ山木武夫をリーダーとする旧新堀村落野目信用組合の動きにみるのできるのである。

明治中期の乾田馬耕にはじまり、耕地整理、小作争議、産業組合運動、負債整理事業等々と連なる庄内におけるさまざまな活動の展開は、この地域の農民が、いかに敏感に体制変動と国家政策の展開に反応してきたを示している。しかもこうした諸活動の展開は、ほとんど例外なく、なんらかの「思想的」支柱をもち、それらによって内的に支えられていたのである。その「思想的」支柱は、多くの場合農本主義的傾向をもっていたと考えられる。とりわけ庄内の産業組合運動の展開の一翼を担った北平田村の渋谷勇夫、大和村の富樫義雄新堀村の山木武夫ら活動においては、加藤完治の思想と人となりが大きな影響力を持ったといえよう。加藤の影響はその思想内容もさることながら、彼が身をもって示す実践的態度にある。とはいえここでは、加藤完治の思想そのものではなく、その弟子たちが庄内という現実のなかで展開した具体的な運動に焦点をあてることにする。

本報告では、特に産業組合運動が展開された大正末期から昭和恐慌期、そして戦時体制期にかけての時期にしぼって考察を試みたい。というのはこの時期は、ある意味で最も鮮明な形で、地主支配からの脱却によって農民が自己の生活の主體的形成を志向し、またそうした運動がかなりの現実的力を持ちえた時期であり、しかもそれが、戦時体制へと向かう国策への「同調」という形をとらざるをえなかった一種の〈悲劇性〉を帯びるという特徴をもつ時期だからである。そしてこうした運動を精神的に支えたのが、「農本主義」思想であり、庄内ではとりわけ加藤完治の思想とその〈人となり〉が、圧倒的な影響力をもったのである。

こうした一連の運動の具体的な展開過程について、ここでは、渋谷勇夫、富樫義雄とともに、「庄内産組運動の三羽鳥」と呼ばれた、新堀村の山木武夫の諸活動、とりわけ落野目信用組合の形成に着目する形で論じてみたい。